

昭昭和  
私和  
四十九年  
三月二十三日  
發行  
（種郵便物認可）  
（毎月一回・十五日發行）

（通第二九八号）

# 慈光

第二十六卷

第三号

次

一	一切無碍	近角常観	(1)
一	一道会の記(二)	榊原徳草	(7)

目

晴れてよし曇りてよし	海野円了	(12)
如来よりたまわるいのち	釈可説	(14)
念仏詩抄	木村無相	(19)

南無阿弥陀仏	花田正夫	(22)
--------	------	------

# 一切無碍

## 近角常觀

本日は一切無碍という題を出しておきました。この意味は、一口に言えはいわゆる絶対の味、すべて何のさわりもなくなりたるをいう。なお分りやすく言えば、この人生に生活する我々は始終さわりをもって、信仰の光を得ない間は人生みなさわりである。

人生はさて如何に生活すべきか、これ人生における一つのさわりである、名譽ということがそろそろ気にかかってくる、これ一つのさわりである、人は学問をしなければならぬというと考えている、これ学問のさわりである、人生におけるすべてのもの一つとして障りにならぬものはない。その障りによって種々と屈托して心身を苦しめているのである。それはどうかと言うに、たとい外の人より見て成程真面目なことも、又善いことでもそれが自分にとってはさわりとなる、なお一つ言えば信仰を求めるということが、さてどうすれば信仰を求めることが出来るかと云うて種々と心をくだく、これ信仰を求めることがさわりとなる

ある。人間として過分の境を得るということは自ら愧じざるを得ない、将来にむかって如何なる事が来るとか来ないとかそんな事に關心するのではない、唯人間實際の道程において力を尽して為すのが吾人目下第一の務めである、即ち信仰上無碍の境である広々とした絶対の境に入るのである。

さればこの境は如何にして得られるか、其境界の有様は如何、自分で思うには、実に一切さわりなき広大なる境に一致する、仏陀の境界を認めることにおいて一致するのである。尽十方無碍光仏の境地、即ち無碍の仏界である。この仏界に入るのである。

第一に吾人の信仰、不信仰という、どうしてそれが得られるかなどというのは、それは信仰は得られるか得られぬかの疑いのさわりに陥入っている、まだ余裕のある話である。ここに仏の境界、尽十方無碍光とは如何、すでに言葉の上にもさわりがない境をいうのである。これは唯言葉の上のことではない、真実仏陀の境に対する味を感じ来れば、自分の心のうちに更に一毫の疑いもはらい去られる。又客観的に世間に対して無碍を認めるようになるのである。

内心無碍になると云うのは煩惱、貪る心、怒る心等の内心の愚痴なる障りに常に縛られているために無碍自在の境

のである。

ところが今無碍とはかかるさわりのさっぱりない様になつたのを云う。一切さわりなしとは物質的のさわりのないのを云うか、但しは学問上の満足をして十分に智識の出来たのを云うか、如何なる点がさわりがなくなつたのであるか。

人生は必ずしも生活のためではない、人生は各自為すべき仕事をなすために生れているのである。学生としても、宗教家としても、教育者としても、政治、実業、労働する者、皆おのの自己の自分を専心つとめることにある。唯生きれば可なりというはたしかにさわりである、唯生きることばかりが決して人生の目的でない、自分に適した仕事をするのが人生の面目である。為すべき生活を為す、それは必ずしも美酒佳肴をいうのではない、唯為すべきことを為す事において始めて満足するのである。無碍となるのである。食物生活は斯くの如くであるが名声名譽なお同様で

に入ることが出来ないのである。しかるに心ここに仏の広大な境にむかえば一切無碍の味を感じることを得るのである。人と人と交際することにおいて一方において悪しく思えば必ずまた他方にも悪しく感ずる、人生のすべてが皆こうである。互に相障える心を起すものである。然るに仏陀の御思召はどうであるか、実にこの人間の心の反対である。仏は仏を信ぜないばかりでなく、仏を誹謗するものあらば、仏は満心をもってこれを憐み給うのである。常不輕菩薩は、害を加える人があると、一切の者は皆仏を有難く尊く思う心を有するのに、今この人はその事に気がつかぬから斯くわれに害を為すなり、われを打ち、われを害することは、やがて仏道に入る縁となると語っている。まして仏陀においては、たとえ吾人が心身に害毒をもって向うても一切無碍で、仏はついにかかる者を同化してしまわれる。かかる者こそ真に仏陀の御側に近づく道である。人間は途中で互に反目した友は、最早その間に一々の碍りがさしはさまるものである、浅ましい次第であるがこれが吾々人間の面目である。仏の眼より見ればすべて一切の人々が助けたい、真の絶対の味を知らぬものは憐れなりという絶対の同情、御慈悲である。衆生の諸々の煩惱悪業にさえられぬはただひとり仏陀、即ち無碍光仏ましますのみである。これを清浄光仏とも歡喜光仏とも云う、衆生の汚穢の

心でなく衆生の慈悲の心ではないのである。親鸞聖人を害そうと辯円は単身ただちに稲田の草庵に到ると、聖人は左右なく平然として出会いたまうた。辯円は一度、聖人の御顔を見ると燃える如き害心が忽ち消え失せ、たちどころに大懺悔して聖人と同一の信仰に入ったのである。これまことに聖人の心中一点のさわりなく仏陀の心を念じ、仏の心をもって心としてむかわれたからである。かくの如く内心における障りは仏陀の御心において一切無碍となるのである、衆生の煩惱悪業を清めつくし給うのである、実に信仰の実験上静に味うべきことである。

この講話の前にお話がありました、私の信仰の余瀝をお読み下さって、それが縁となって心が安らけくなったとお話であります。その方は十年程も前から種々と御苦しみになって居られた所、右の次第で御安心なされた。すぐに親類の家に行つて喜びを語られたが、その時親類の方の云わるるには「御前はすでに仏の光に攝取されて居つたのである。それが今漸く気がつき目が醒めたのである」と云うて共に喜ばれたそうでも私も大層ありがたく感じました。

世の中を見るのに、人と人とのつき合わせの障りが実に多い、誰でも彼でもみなこの障りをもっている。その障りの未だ来ない間は人間は真面目でない。さて世の中は有碍

の境である、安らかならぬ所であるということに目のついて来ると、その態度も真面目になり、自分の罪惡の多い、障りのあることも、人間の力の及ばぬことにも気がついて来るのである。

私も近頃懺悔録を出しました。又今のよう長々御苦しみになったお方の話を聞いては同情の念に堪えない。此処へお出での方々は、すでに一つの障りを持ってござつた方又現に持つてござる方々とおもう。さて、仏の無碍の眞の味は、まず有碍を感じなければ、人生は障り多いものであることに気がつかなければ、無碍の味は分らぬのである。自分の障りあるを思うにつけ仏のお慈悲の偉大なることを思う。仏のお慈悲というは概念や觀念やではない、そんなものは本当の力ではない。自分の内心にあらわれたる仏の偉大なる慈悲は、目に見たり、姿にあらわれたりすることではないのである、本當にその御慈悲を心の底に徹底して感ずるのである。仏の同情はこの人間の同情の全く滅した所にその同情は始まるのである。善人なおもて往生をとぐいわんや悪人をや、人間の力の絶滅したときに始めて感じ来るのである。世間の何物にも心満足する能わず。四面障りをもつてかこまれたるとき、唯一路、仏陀の御慈悲の強きを感じ来る。それにむかうときにはじめて有難いと心に徹底したとき、始めて味うことが出来るのである。

絶対御慈悲の望むはその態度は眞に真面目である。唯それに向つてあせる態度は未だ大安心の態度ではない。あせるとは信仰に対する障りである。その例は、ある人今まで

儒教の教育を受けて多少禅の味も持っていたが、自分の財産を銀行との関係で支出しなければならぬ事となり、その上種々法律上の汚名のため入獄することになった。その人の友人がその人に云うには「お前入獄すれば一切無我無心にならねばいかん」と。その人は「自分がかくなつたのは実は天なり命なり、すべからく無我無心になるべしと考えて、そうやって見ると、どうもいかん、無我無心になりたけれども実にどうも難しい」と云うて苦しんで居つた時、私はその人に会つて話した。その人の態度はたしかに絶対に向つてながめて居る、然し無我無心にならねばならぬ是非そうせねばならぬということは、是れ無我無心ではない、無我無心になれぬのである。

仏陀の絶対の境は本来無我ではないか、あなたは今まで名譽とか財産とかのために心靈の問題を冷淡にして居たのが、今や心中に心靈上の大問題が輝いて来たのである、仏天の偉大なる御はからいを唯ながめさせてもらうばかりが本来ではないか、無我にならねばならんとあせるのではない、本来無我なんであるところ申したところ、その人は非常に喜ばれた。その意味は、吾々本来の仏の絶対の

御慈悲に浴して従容として日暮しさせてもらうが本来の面目である。そうしなければならん、そう思わなければいかんと云うのではない、すでに仏の御慈悲の中に居る身が不可思議の縁に逢うて気がつく、気をつけさせてもらうのである。

噫、実に自分は如来の子であつたかと悟つたのが眞の面目、目が醒め出した味いである。世の中のこと皆仏天の御はからいなりとおもう、いつも無碍の大境界を吾々の有碍心をもつてはからおうとするのである。人間の考をもつてかれこれ考えるのはあやまりである、はからざる事柄のおこり来るも皆仏の偉大なる御導きがあるからである、到底吾人の心の愚痴ポイものは唯仏陀に信頼する外はない。仏の御心よりは一切の人間をどうしても導きたいとおお慈悲で満ち満ちて御座るのである。人々その慈悲の光の内に居ながらその光を一向感ぜぬのである、丁度水の中に居ながら渴を叫ぶのと同じく、此空氣の中にあつて毎日毎時呼吸しながらも誰一人空気で生活することを知らぬも同様である。吾人が今まで身も達者で仏後三千年の今日この教を聞きながら更にそれとも思わぬ浅間しきものである。

蓮如上人は、何事も仏天の御はからいなりと、その偉大なる御力をきたすとき始めて有難いと思ふのである。私は何事も仏にまかせて生活するとあらぬ体で言う人があるが

その人の画策との調和はどうかと云うと、その人は唯口ばかりのすてぜりふであることが分る。これでは根底も何もない、信仰は決してそんな捨てぜりふでない。仏の御計いをそのまま信じ奉るので、決してあせるのではない、一切無碍の境地に入るのである。吾々が明日の事をかれこれと思うが、それは積極にも消極にも何もかも一切無碍に仏の御計いにまかせ奉る以上、従容として為すべきことを為すのである。

もう一つ人生上すべての客観的のものみな仏の力ならざるはない。一例を言えば、これは市ヶ谷の刑務所に居る人で死刑に処せられる人、その人は他の人に憎まれて居る、私がある人に会って話した。仏は人間の力の極まる所に大慈悲の力あらわる、仏は精神のみならず肉体においても救われるかもしれぬ、私はその人に極く簡単に話しました。その人は今まで誰が何と云うても剛情であったのが、その時今までの事を懺悔し、私はどうあろうとこうあろうと仏様にまかせ奉ります、と云うたのに深く感動した。

他の一人に会ったところその人が言うのに、先日、本を読むと、なまけと云うことが書いてあった。それは、大山元師が獺に行く時、部下のものに注意して寝鳥を打つなといわれた、それに感じたという。その人は自分が今まで種々な悪事をしながらそれを思わない、然し大山さんのなさ

の方面一切無碍である、世界中すべてのことにその味いを見出されるのである。

人々は絶対を憧憬する態度はあるが、それに安住する態度が出て来ない。その安住の見地で夫々の仕事をするという心が起らぬ、即ち絶対無碍の地盤に立って無私の行いをする、仏の広大力に立って相対人生の上に仕事をするのである。応用のかなわぬ信仰は眞の信仰とは云えぬ。

人生迷の立場をぶち破って仏陀絶対の境地に入る、その絶対の境地より再び人生この迷いの上にもち来る、ここに眞の味いが活き活きして来るのである。かの日蓮上人の未だ佐渡に流されない以前と、その後の上人とは一見非常に変わっているように見える、激烈なる上人は和順なる上人となられている。この何事も和平に同信の人に告げた上人こそ、その眞の面目である。ルーテルが九十五ヶ条を掲げて宗教改革を叫んでオームス議場に出た当時のルーテルとワルドブルヒ城中の幽居からウキテンベルヒに帰る時のルーテルとは、先の一步も退かざる意気は化して和平の態度となった、これ最も味うべき点である。但しもとよりその中心の信念は毫も変化せず終始一貫して居るのである。親鸞聖人は始めより和平温順の態度であったが、その所信を主張するに至りては実に前者に一步も譲られぬのである。そのため讒言にあい流刑に処せられたが、その所信は

けということだけ感じたと見えて私に話しました。

なお他の一人は歎異抄を毎日二度宛読んでいる。その人もとより裁判の結果死刑とばかり思っていたところ無期刑となったので非常に喜び、確固な信仰を得たという。

私共はこれ等の人々からかえって深く感じさせて貰うのである。世の中のことすべて仏の広大なる御思召なりと思えば何一つ不足もないのである。皆ここにおいてになる方々でも、気がつけば全て夢のようなもの、目の醒めた境が本来無碍の境である。全体吾々は本来無我無心のうちに居ながら、いつもいつも心をあせている。

人生上の生活、名譽、位置、財産に日夜心を勞している大經に「田あれば田を憂い、宅あれば宅を憂う」とあればあるで憂い安き時がない、又「田無ければ亦憂う宅あらんことを欲す、宅無ければ亦憂う宅あらんことを欲す」と、無ければないで亦心配する。

仏陀の境に入れば更に憂いはない。聖人の常の仰せに「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」と。法然上人から選択本願の念仏のいわれを聞かれた聖人は、唯有難いというその御心においてすでに信仰の大海に入り給うたのである。信仰を得んとあせるはずで自力である、碍りなき仏陀の慈悲、これを一度信じさせてもらえば、この心さわりもなくなり、すべて

一步も退けられぬのである。その晩年に至りては唯仏天の御計いに任せて一切無碍自在の境にありて教を弘め給う、消極に見えるときに眞に積極の味のある所である。その為すべき仕事を真直ぐにするには活版屋の小僧も、国の大臣も更に変る所はないのである。仏陀一切無碍の境に任して進み度いと思えます。

今日のお話はそれからそれへとお話しましたのでまともらぬところもあつたようであります。要するに仏天の御計いにまかせ奉り各自なすべき道に志したいと思えます

「求道」

第二巻第六号より



# 一・道会の記

(二)

榎原徳草

△井上先生のお話の続き▽

も一つ、それは昭和十三年に比叡山で白杵祖山先生の大無量寿經の御講義の会があり私も参加しましたが、この会は明けゆく叡山の会座で白杵先生が白い髯をなびかせながら、大經の御ところを諄々とお話し下さった、実に清らかな会でありました。

ところがこの会を終わって京城に帰られた頃から白井先生の奥様のお病気が始まったのです。一度は快復されましたが十四年に再発されて亡くなられました。これは我々人間の家に誰しも起ってくる出来事と思いますが、―これは私の考へですが、仏様のお心を分らせて頂く本能感情とでも申しますか、そういう人間に与えられた感情に本願を頂かせていただく心の素材と、それから人間の感覚的な自然感情と申しますか、そういうものは人間の上では融合し交錯しています。これが人間だと思えます。

ところが感覚的な自然感情は、或時は嬉しく、或時は悲

か。白杵先生に今申した胸中を申し上げたんです。「お念仏は申しておりますが、どうも私からは砂をかむようなお念仏しか出てきません、どうも変であります」というようなことを申し上げられました。

その時、白杵先生はしばらく黙して居られて、やがて仰言るには「あなた方から御覧になると自分のような僧侶という者は―白杵先生はお寺を持って居られる僧侶でなく、真に求道者としての僧侶であられた―自分のような者はさぞ清らかに見えるでしょうけれども、実を云うととてもあなた方の想像のつかない濁りの中に居ります。もしあなたのお念仏が砂をかむようなら、私の念仏は蠟をかむような念仏です」と述べられました。

白井先生は驚かれて、白杵先生のお顔をしばらく仰ぎ見られた、すると沈黙を続けて居られた白杵先生が「ただけれどもお念仏はありがたいですな」と言われた。それでその時ハッとされたと言われた。今までぐるぐる迷っていた心にサッと光りが射しこんできた、そういう思いがして、それで御礼をして帰えられた。その時白杵先生が中津駅まで送って下さって、汽車が出てゆくまで白い髯をなびかせながらじっと見送って下さったと承りました。

これは先生が五十歳を越されて起った一つの世界の開明ではなかったかと思えます。歎異抄第九章に述べられてあ

しい、この明暗は誰の上にもあらわれます。ところが本願を賜わる、今かりに生命感情と申しましたが、そういうものともつれ合ってくる、これが人間の姿かと思えますが、昭和十四年に奥様のお病気が段々と悪くなられる、そしてお医者様から秘かに危険だとの警告をうけられた先生の御心の中に、そうなって参りますと何とも悩ましい心が襲いかかってまいりました。

そうすると、前年に叡山で白杵先生と共にお念仏にしたっておいでになった御心が渾沌（こんとん）としてきて、それが疑問となられたようであります。こんな筈とは思えない、例えどんな事があっても仏様のおこころ一つに安らわせて頂いたと思つて居るのに、心はかくの如く暗澹とした雲霧に攪乱されてくる。

それで昭和十四年春四月、恐らく春休みと思えます。先生はその事一つで朝鮮から玄海灘を越えて九州の中津に白杵先生を訪ねられました。その時先生は確か五十一歳です

るおこころ、そのおこころとは別に、やむにやまれない先生の生活体験と云いましょうか、そういう人生体験の中から又一つの新しい扉が開かれたのでなからうかという感じが致します。

皆様はよく御承知ですが、先生は柔和な、穏やかなお姿で在られました。先生の御一生を色々思い起し、その記憶を辿ってみますと、本当に苦難の御一生でございます。その詳細を申すいとまがありませんが、幸福なお方では決してございません。人間的にはむしろ悲痛なことの連続という御一生と感ずるのであります。だから先生の内面の御生活というものは実に厳しいものがあつたと思えます。

そういう御心の中に本願を貫き聞かれた、従つてその柔和なお心の奥に厳そかさというものが強く感じられます。御亡くなりになりました時、私は山口県の宇部に参つて居り、その会の終つた夜、電話で知り、予定をくりあげて其の夜の列車に乗り、翌朝京都の御宅に着き、先生にお会い申上げた時感じましたことは、その先生の御顔は威厳に満ちたおごそかさ、そう申しても申し足りませんし、単なるおだやかさとか、やわらかさでは云いつくせない、そういう厳かなものは、先生の御一生の最後の御姿の上に現れ出していたことをまざまざと感じました。

そういう厳しい生活の中から、少年時代からの人格の追

求という問題が、ただ阿弥陀仏の大いなる御慈悲によみがえるところに果たされて行かれました。それは先生の内外とにわたる御一生のお姿がしのばれますわけでございます。

先生の御晩年、一番近くに居られたのは浄住寺さんですが、私は神戸に居って度々お邪魔した位ですけれども、そういう厳しさの中から滲み出る温かさ、慈愛に満ちた御姿、矢張り人格というものの行き着くところはこういうものなのであるかという感じがしみじみと致すのであります。そういう点から先生の御一生は果てしない求道の一途の道に生きぬかれたという事を思いますし、同時に私共がどうかすると親鸞聖人の教を承りながら安易に御慈悲にもたれかかる傾向を持つのですけれども、先生のお姿の中にはもたれあまえるようなものは微塵も持って居られなかったという感じがいたします。

本願ほこりということがありますが、本願にほこるということ、これは一つの大切な問題でありましょうし、私共は本願の中に私のすべてを投げ込ませていただくことですけれども、それは甘えたりもたれたりする性質のものでは決してない、そういうことを身をもって私共に告げ知らして下さったところに先生の人となりというものを感ずるのであります。

ようやく三年の終り頃になり、今までは人生ということを考えてことがなかった私が、人間は何のために生きるのかとか、そういう問題を考えるようになりました。すると多くの先生のお話の中でも白井先生のお話だけが何か耳にはいつてくるようになった。

白井先生はにこやかに落着いて生徒が反抗しても何等それに関せず、諄々と説かれるという風でありました。三年の終り頃になって白井先生は自分の信念というものを高等学校の生徒に隠さず吐露されました。自分は如何にすべきか、それは自分に堪えられない、出来ない、ということから浄土真宗に入ったのであるという、私は明確には覚えていないのですが、そして歎異抄の一部をプリントして、それを学校の講義でされました。

私は宗教というものは全然知らない、私の父は日蓮宗で書物もありましたので日蓮宗だけは知っておりました。それですから真宗という名も知らない、そんな状況の下で白井先生の学校でのお講義を聞いておりますうちに、先生は嫌いだっただが何か真実なもの、本物を持っていられるということが段々と思われてきたようであります。はっきりしないがそういうものが先生から私に向ってきた。私は反抗しますけれども私に何か、慈愛と申しますか、そういうもので向ってくる。

何を申しましてよいやら、先生にお別れして以来群り起る中から、心に浮ぶままを秩序もなく申し上げました。

次ぎは日下部智先生のお話の概要を誌します。

かねてからお目にかかりたいと願っていた諸先生方にお会い出来、こんな大収穫はそれだけで満足しているわけがあります。私は東京の理科大学の物理学科に勤めて居りますが、かねてからこの会にお招きいただきながら今日まで失礼しておりましたが、白井先生の追悼を行われるのとこので参上しました。

私は二高に大正十年に入學し、その時に白井先生が二高にお出でになりました。その時代の白井先生を申し上げたいと思います。先生は当時三十五、六歳でありましたが、私は二十歳でした。

当時の先生は倫理学を受持って居られて、週一回の講義がありまして、二年三年と毎週ありました。私は生意気な学生でありまして倫理学は非常に嫌いで、先生の講義はいやで、後の方で居眠りするという、実に不埒（ふらち）な態度をしていたのであります。一年から三年まで、その間先生は何を話されたか、何かカントの倫理学かを講義されたようでボンヤリ聞いていました。

丁度関東大震災の時でしたが、一時間目をサボって校舎にはいつて二階の教室の方へのぼって行くと、すれちがいに先生が下りてこられる。そこで先生とパッと眼が会ってハッと思いました。こりゃ大変なことになったと。こんな私でしたが、先生は校舎の近くに住んで居られたので、それで先生についていつて、そこではじめて浄土真宗のお話を承ったのであります。

その時に先生が勧めて下さった本は藤秀翠先生の「光明の広海へ」という著書でした。私は始めて宗教というものに接し、先生の本を、何と申しますか、砂漠でオアシスに出会ったと云いますか、そんな気持ちで読みましたが、その時から私は一転して浄土真宗の教から離れることが出来なくなりました。

白井先生の確固たる信念と云いますか、しかもそれは和やかで私もそれに包まれて終った。全く他力によって封じられたという感じでした。

その後私は先生に直接お伺いしませんでしたでしたが、三年の終りですから、東京に出ることになりました。それで先生は近角常観先生を紹介して下され、それから近角常観先生に、それからお亡くなりになってからは近角常音先生にお教を頂いてきました。

これを通して常に白井先生は私の心の中で私に注意し

て下さる。で、私は二女に先生の御名前の一字を頂いて成子と名づけました。私は白井先生に二高で教を受けたのが私の一生を左右したのであり、先生のお名前は忘れられないと云ってよろしいと思います。

先生は柔和な中にも厳しいものがありまして、誤魔化せないという気風を受けております。私は直接ではありませんが終戦の時に、日本は今後どうなるかという心配に対して、聖徳太子や親鸞聖人のようなお方が居られるので日本は大丈夫だと白井先生が云われたと聞いて居ります。これで失礼いたします。

× × × × × × × × × × ×

### △ 隨筆集 V

美の永遠性

高村光太郎

ある一つの芸術作品が永遠性を持つというのは、既に作られたものが、ある個人的観念を離れてしまつて、まるで無始の太元から存在していて、今後無限に存在すると思ふか思えないような特質を持っていることを意味する。

夢殿の観世音像は誰かが作つたという感じを失つてしま

## 晴れてよし曇りてもよし

(北米) 海野 円了

私共は皆、楽しい幸せな生活をしたいと、一生懸命に、

毎日毎日、朝から晩まで、働き続けているのです。学校で勉強するのも、さまざまなおスポーツをやつて身体を鍛えるのも結局は幸せな生活がしたいからであります。

然し実際問題として、現実はどうでしょうか。長年の間苦勞に苦勞を重ねて育てた子供は、親の思うように育つてくれない。子供の結婚問題で心配し、せっかく結婚させても、思う様にならなかつたり、今年こそはと頑張つても仲々思うにまかせないのが人生の常で、結局人生は、苦惱からのがれることは出来ません。「思うこと一つかなえばまた二つ、三つ四つ五つ、六つかしの世や」と、昔の人が詠んでいますが、全くその通りであります。

私共は、不思議な因縁によつて、五千哩の波濤を越え、このアメリカにやつて来ました。そして幾十年は、夢のように過ぎてしまいました。この頃はかわいい孫の守をしながら、過ぎ去つたさまざまの出来事を思い出している方も

つて、まるで天地と共に既に在つたような感じがする。そして天地と共に悠久であるように思われる。恐らく芸術の究極の境は此処に存するであろう。

われわれ芸術にたずさわるものがこの永遠性を日月のよう尊崇し、今日あつて明日は無いような芸術的生命から脱却したいと思ふのは、あながちただ斗宵の徒たるが故ばかりではなく、至極当然なことである。と君に足りぬ人

美の普遍性

永遠の時間性はまた空間性に変貌して高度な普遍性につながる。この普遍性は、人間精神の地下水の意味における遍漫疏通の強力な照応であつて、これなくしては芸術の人類性が成立しない。およそ芸術上の大ききとはこの意味である。

真に独自の大きさを持つ芸術作品は直ちに人に受け入れられない、必ず執拗な抵抗をうける。不可解のためである事もあり、解りすぎためである事もある。しかも太陽が霜を溶かすようにいつの間にか人心の内部にしみ渡る。真に大なるものは一個人的の領域から脱出して殆ど無所属の公共物となる。ありがたさがありがたなくなるほど万人のものとなる。「ベトオフエンは死んだ」と言われる頃、ベトオフエンは人類の心に限なく住むに至る。

ありましよう。

先日ある方が「今日新聞を見ると、広告欄に三つの黒樺(わく)がありました。皆六十何歳かでありました。自分もすでに六十五歳だが、何となく心細くなったから、法話会へお参りして来ました」と申されました。

「それは大変結構なことです。何となく心細いと感じられるのは、宿善が催して来たのであります。どうか、これを機会にもう一步進んでいただき、本当の信仰にめぐめて下さつたらその淋しさがきつと救われます」と、私は答えました。考えて見ますと、一世の多くの方々は、頭に霜をいただき、人生の秋を迎えています。お友達の方々は、次から次と亡くなつていかれませう。

蓮如上人は、御文章の中に「われやさき人やさき、今日とも知らず、あすとも知らず」と書いておられます。私共は人やさき、人やさきと思つているのでありますが、一寸先は分らない、はかない生命をかかえていながら、何とも

ないのが私共であります。

一番かわいい自分は、果してどうなるかを、考える時間さえ持たないのであります。人生の何ともいられない淋しさが、眼前に横たわっていながら、考えてみようともしないのであります。やがて最愛の妻、杖とも柱ともたのむ夫それからわが子や孫と、別れていかなければならないことを思えば、何となく淋しいけれども、人の世の定めだと、自分なりにあきらめていられる方もあるでしょう。しかし、それは本當の解決ではありません。

皆様は、現在只今、幸福ですか、ああ人間に生れてよかつた私は幸せ者ですと、心から笑えるお方は果して幾人あるでしょうか。自我のために、面白くないその日暮しをしておられる方はないでしょうか。自分だけが正しいと、うぬぼれている方はないでしょうか。自分の愚かさや、間違いに気づかないで、他人を裁いているのではないのでしょうか。

多くの方々が、あらゆる苦悩の中にありながら、苦悩を苦悩とも感じられないということは、いよいよ深い迷いを意味するものであります。

仏教が勝れた教えであることは、皆様にはよくお聞き及びと思うのであります。しかしその教えが、自分自身のために、また家庭生活のために、どの程度力になっているのかせ出来るか、などとお話し申し上げたのであります。ご夫人は大変お喜びになられ「病氣にならなかつたらお話を聞かせて頂く機会が恵まれなかつたはずです。病氣のお蔭であります」と病氣そのものを、喜びに転じられたのであります。これが病氣を超えるということであり、病氣にさまたげられない境地なのであります。

もう一つ実例を申し上げます。S夫人は、両親を亡くした甥を引きとって、自分の子供のように可愛がって育てました。学校の成績も大変よく、ドクターになって開業していたのですが、突然亡くなってしまいました。この悲痛が御縁になって、S夫人は信仰にめざめられたのです。それからしばらくたって、S夫人にお目にかかりますと、「親戚やお友達に年賀状を書くに当り、私は世界一の幸せ者でございますと書かずにはおられない、本當に幸せな身にさせて頂きました」と、私に語られました。これが悲しみを超えることでもあります。

罪深い身でありながら、罪業深重を超え、散乱放逸でありながら、散乱放逸を超えさせて頂くのであります。

信心には喜びがとれない、日常生活において、仏の無限の力、無量の慈悲、無辺の智慧が働いて下さるのであります。

富を得ること、健康に恵まれるのも、幸せに違いありません。

を反省してみる時、そんなに役立っていると思われぬ方もあるでしょう。これでは、多年多大な犠牲を払って仏教会を経営し、もり立てて来た所詮がありません、聞法に聞法を重ねられに所詮もないのではありませんか。

そこで一つ、考えていただくかねばならないことは、どうしたら教えがわかるか、教えが自分のものになるか、ということであり、今まで通りの聞き方ではどうも駄目だと気づくことが大切であります。教えの道理がわかり、理屈をおぼえても、それは知識であり、理解であり、思想であって、信仰ではありません。従って法は働かず、救いを感知することも出来ません。

救いは個人個人の問題であり、宗教は体験を通さなければなりません。一度信心決定させていただきますと、親鸞聖人が仰言った「念仏者は無碍の一道なり」の境地が恵まれるのであります。これが生きた仏教であります。

信仰生活をされる方にも、貧しい方がおられます、然し貧しい生活をしながら、貧しさを超えさせて頂けるのであります。また病氣の方もおられますが、病氣を超えさせて頂けるのであります。先日、病床のT夫人をお見舞いたしました。そして、病氣で寝ておられるそのままが、限りない恵みに支えられ、包まれているということをお話し申し上げました。そして救いとは何か、どうして仏におま

ません。然し富める人にも苦悩はあります、健康な人にも思うようにならないものがあるのです。

吉凶禍福、順逆二境を超えて、何ものにも乱されぬ境地を恵まれてこそ、眞実の幸せと云われます。

足利浄円先生は

晴れてよし 曇りてもよし ふじの山

さかまく雲は そのままにして

と詠んでいられますが、晴雨にかかわらず、泰然としてそびえ立つ靈峰富士の、ゆるがぬ姿の如く、人生の喜びと悲しみにかかわらず、何時も輝きを放つ信仰の光りは、苦しみに負けず、悲しみにも動乱することなく、人の世を生きぬく、この上ない力であります。

一九六三、六月稿了

編者追記

海野円了師は昨年古稀を迎えられ、目下ロスアンゼルスに居られますが、北米へ開教使として三十九年間、各地の仏教会で念仏生活の根本、信心を説き続けて下さいました。御息方の懇念によって、師がラジオで放送、又は新報に出された法話集等をおさめて記念出版をされました。その中の一篇を頂きました。本年は北米の開教七十周年で新しい歩みをせられることでしょう。



# 如来よりたまわるいのち

## 釈 可 説

(註)可説居士はすでに処刑せられましたが、その二十日程前に書きのこされた手記であります。県下の野呂界雄師が福田正治師から受けられて大切に保存していられたものであります。念仏者になられた居士に私も二度慰問し親しく談合し慈光誌も読んで下さった方です(編者)

仏典に雪山童子の物語がある。

諸行無常 是生滅法

と、どこからともなくこの偈文が流れて来た。修行者はあたりを見た。そこに一人の羅刹がいた。修行者は、どうか後の偈文を聞かして下さいとたのんだ。しかし羅刹は仲々「ウン」と言わない、それどころか「俺は腹が空いて居て口を聞くのも大儀なのだ」と言っていて聞かしてくれない。

修行者は考えた「この身はいずれ死ぬ身である、どうせ死ぬ身なら、この身を羅刹に施して後の偈文を聞こう」とそこで修行者は羅刹に向かって言った。

法は狂いのない、迷いのない、惑いのない、たしかさを知らせて下さるのです。

一切狂いのない真実理、一切迷いのない活動、一切の惑いのない確信、決定。始めもなければ中途(なかば)もない、又終りのない、光明無量、寿命無量の絶対間違いのない真実の活動を知らせて下さるものです。

こうした絶対狂いのない真実の大道を聞けない頃の私は生れたものは必ず死ぬということしか知らなかったのです。往きて生き、生き活かされる世界を知りませんでした。死が問題になります、この故に悩みます、煩悶します。その次に、死後のことが問題になります。次に死に方が問題になって来ます。

今私の思うことは、若し所長から「これから刑の執行をする」と云い渡されたら、一体どのような心境、態度をとるであろうか。どのようなことをまず思い考えるであろうかと思われる。

今日まで何人かの死刑囚(ともだち)が執行に臨んで、それは立派であったと云う。しかし私には到底皆のように立派な死に方はできないと思う。しかし私は腰を抜かし足腰が立たなくなったにしろ、静かに一息一息、乗任せねばならぬ階段をしっかりとみつめて、一声なりとも南無阿弥陀仏と頂きたい、最後の一息に至るまで南無阿弥陀仏のみ

「私のこの肉と血を施します、どうかこの身とあなたが持っている後の偈文と交換して下さいませんか」と。すると羅刹は後の偈文を修行者のために

生滅滅已 寂滅為楽

と叫んだ。しかし修行者はなお地上に立っていた、修行者は真実の生命に転入せられたのだった。

五十年、六十年、七十年と人生の歳月によって救済道、信仰の世界は語られるものではない。蓮如上人はこれを誠めていわれた。

「若きとき仏法をたしなめと候、としよればねむたくもなるなり。若きとき仏法はたしなめと候」

「仏法には身をすててのぞみもとむる心より信をば得ることなり云々」

「仏法は無我にて候」

仏法は私のないことを教え知らせて下さるものです。仏

声「若不生者、不取正覚」のこの確かなみ声をたよりにおもむきたい、そればかりである。外に何も無い、生命の長短もない、今に専念し、専注する外に昨日も亦明日もない「今」「今」何といっても私には「今」に勝る尊い縁はない。「今」に勝る宝はない。「入る息、出る息を待たず」と云われる、入る息、出る息の間、この「今」私はここに人生のすべてを托して生き活かされたい。

如来の作願をたすぬれば苦悩の有情をすてずして

廻向を首としたまいて大慈心をば成就せり

とあり、又、

「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなし乃至、彼の阿弥陀仏の四十八願をもて衆生を撰取し給う。疑いなく慮りなく彼の願力に乗ずれば定んで往生を得と深信す」とは、一息一生、一息一流転の性を如実に物語っているのではなからうか。

自力無効、一切は自己にとつては始末のしようのない存在であります。何一つとして私の仕事は成し遂げられないものであるということ。「出離の縁あることなし」と言い切らせて頂いたここに、一息一息の間の生を、無量寿、無量光にしっかりと抱かれた時です。

死を逃れようとしていたこの自力の功をたのむ時は、出

よう出よう、逃れよう逃れようとしか思えない時なのです  
身を捨て、心をすてられぬこの執着強い私としられて、  
始めて「私の働く余地なし」と知られ、私は一息一息の間に  
無量寿、無量光の永遠の境界に生れさせられたのです。  
いや昔からここに住み、ここに居たかのも知れませんが。

真の生命の实体、真の無量寿、無量光の恩恵は死の境界  
そのものの中に在り、そこに光闡（こうせん）され、煩惱  
熾盛の悪業迷妄惑乱の中に、そこに、念仏衆生撰取不捨の  
よびかけ、如来の生命、如来の願力、御意趣があるのです  
この独房に、ここにこそこの量の目一目一目に如来の念  
力がこめられているのです。この獄の窓のつめたいこの感  
じ、ここに如来の悲心はそがれているのです。パチンと  
大きな音をして閉じるこの錠、ここに十方の諸菩薩の光明  
遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨の証誠、護念が示めされ  
ているのです。この一滴の水に、一枚の塵紙に至心信樂欲  
生の他力廻向の念仏、南無阿弥陀仏のみ声がいたりとい  
て下さるのです。

私の今住むこの境界のありとあらゆるものは如来の絶対  
の顕現の実態、表現であり、そうでないものは何一つな  
い。こうして曲りなりに、誤字だらけなりに字を書かせて  
いただけるこのことも。何とかかんとか字を読ませていた  
だけ御聖教を読ませて頂けるこのことも、目に物を見、仏

ること、鼻に嗅ぐこと、身に触れること、手、足、一本の  
毛、一枚の衣、いや、南無阿弥陀仏のこの念仏。手にかけ  
ている念珠、写経するこの本の筆先、一枚の紙に至るまで  
何かおのれの功を己れの働きを、おのれの行為を、飾り物  
としてつくり、かくしていないでしょうか。私の合掌の  
この姿こそ、仏法を、仏法の財物をわが身の飾りものとし  
ていることに気づかされる。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、

私は、凡夫でもなければ、愚か者でもなく、智者でな  
ければ、利巧者でもない。ただ、一息の間に生かされている  
如来の息吹きでしかない、いや、如来の息吹きでありたい  
この生命を、この生死を、そのまま如来の生命、如来の  
願果と信知したい。この私の活動を如来の活動とし、如来  
真実の顕現と信樂したい、かく頂戴したい。この身を礼拝  
したい、この私に向って合掌したい。

いや是非こうでありたい、これが如来の息吹き、如来の  
願行です。これが如来大悲の発願廻向の御意趣です。これ  
が南無阿弥陀仏、真実他力廻向の仏心、住持の信生活です

× × × × × × × × × ×

諸行無常是生滅法

行方も知れぬ無明の世界から、安心のない流転輪廻の世  
界から、真実の世界、常住の世界を求めて、この目で、こ

像、仏画、書画を見させて頂けるのも。耳に南無阿弥陀仏  
の声と、お経の声と、お前は幸せ者よといわれるこの声の  
聞かせて頂けることも。この身に、念珠をかけ、合掌をし、  
静かに仏のみもとに坐して居られるこのことも。この口に  
ドモリながら、声を出し、南無阿弥陀仏と口まねのできる  
ようにさせて頂いたこのことも、皆、皆、御恩でした。  
私の一足、一手、一指、指の垢にいたるまで、毛の一本  
に至るまで、一、一に、不取正覚の願力が、生起本末の御  
意趣がかけられているのです。

× × × × × × × × × ×

私は凡夫だから、私は愚か者です、私は何も出来ない無  
力ものです、私は無智無気力の意気地なしです等々と誰も  
が皆同じ事を云う、私もその一人ですが、これはみんな嘘  
です。何故なら、そう言う私も誰も、一言、馬鹿と他人に  
何かの都合で云われてみなさい、「私を馬鹿とは何だ」と  
云って怒り、時によってはそのため、誰かのように懲罰委  
員会とか名譽毀損とか云って騒ぐでしょう。「お前は無智  
だ、意気地なしで何も出来ない」とでも云われてみなさい  
それこそ昨日の友は今日の敵です、いやな友は今絶交で  
す。こんなことではたして愚か者だ、馬鹿者だ、無力者だ  
と云えるでしょうか。

私共は、目に見えること、耳に聞えること、口に出て来

の耳で、この体で見よう、聞こう、知ろうとした。然しこ  
の身で、この智慧で知ろうとした真実の世界には自分の力  
では到ることは出来ないとした時、身を捨て心を棄てた  
ところに

生滅滅已寂滅為樂

と真実の音が聞こえてきた、届いて来て下さった。私は  
死んだではありません、身を捨て心を棄ててこのはかな  
い息の入出から、如来の息吹き、無量寿、無量光の生命と  
して生かして頂けるようにならせて下さったのです。

念仏もうさんと思ひ立つ心のおこるとき、即ち撰取不捨  
の利益にあずけしめ給うなり、とは、私の息吹きから如来  
の息吹きへと展開されたそのところに、そのまま念仏申さ  
んと思ひ立つ心のおこる時、この時は「今」です。今こそ  
時の極みです、如来の息吹きの極みです、極促です。円満  
の御姿です、南無阿弥陀仏です、南無阿弥陀仏です、南無  
阿弥陀仏です。ハイ南無阿弥陀仏です。合掌

× × × × × × × × × ×

こいよ こいよと よぶ親さまは

こいよ こいよと われに来る

四月五日 可説記

(註) 四月二十六日、刑死。弥陀仏の招喚の声を  
常にききつつ浄土への旅立ででした。

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

如来大悲の恩をしり

// 信心のひとにおとらじと

疑心自力の行者も

如来大悲の恩をしり

称名念仏はげむべし—— //

如来大悲の恩を知り

如来大悲の恩を知り

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ——

念 仏 の み ぞ

ただ念仏

ただ念仏

念仏のほかに

信心なし

// ただ念仏のみぞ

マコトにて

おわします—— //

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

今 日 一 日

今日一日が

わたしのいのち

昨日はすぎさり

明日はまだ

今日一日が

わたしのいのち

今日一日を

どう生きる——

如来にてまします

名号そのまま

往還にてまします

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

そ れ 全 体 が

人生とは——

生れ

老い

病み

死ぬるのです

それ全体が

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

う し ろ に

あなたのうしろに

ナムアミダブツさまが

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

今

助けらるる  
助けらるる

今 助けらるる

今 助けらるる

昨日でない

明日でない

今 助けらるる

今 助けらるる

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

今 助けらるる

今 助けらるる

名 号 そ の ま ま

名号そのまま

呼声にてまします

名号そのまま

わたしのうしろに  
ナムアミダブツさまが

みんなのうしろに  
ナムアミダブツさまが

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

み名呼べば

み名のマコトの

聞こえきて

なおみ名を呼ぶ

ほかなかりけり

かの土にして

さとりをひらく

かの土にして

## 南無阿弥陀仏

花田正夫

さとりをひらく

弥陀の誓願不思議に

たすけられまいらせて

たすけられまいらせて――

トンボよ

トンボよ

千布団の上の

トンボよ

トンボ――

空しきままに

言りもよし

言わざるもよし

みな空し

空しきままに

ナムアミダブツ

幼くして母を亡くした信友は、人の顔色ばかり苦になつて、捨てられはしないか、嫌われはしないかとすこしも安心の時は無かった。幸に高校に入り、仏青の仲間入りして歎異抄を読むと、殆どはチンプンカンプンであったが、唯「撰取不捨」とあるのに驚いた。

「自分は今日まで捨てられはせぬか、嫌われはせぬかと案じていたが、仏様の方から、撰取して捨てじ、と仰言つて下さる。これこそ真実のみ親である……」

と強く心を打たれ、それから聞法して、ほどなく念仏申す身となり今日におよんでいる。

この友人が青年などによく語るには「南無阿弥陀仏とは仏様に向つてお母さんと呼ぶのと同じ味わいである。しかし同じお母さんと呼ぶにも生みの母と義理の母では呼ぶ心がすつかり違う。生母をお母さんと呼ぶように、南無阿弥陀仏と申せるようになることが大切だ」と。

聖人の大勢至菩薩和讃に

子の母をおもうがごとくにて衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず、如来を拝見うたがわず

とあるのも思いあわせられる。

思うに「お母さん」という言葉は不思議な言葉である。元来、子が呼ぶべき名であるのに、母は子がおものも云えぬ時から、お母さんが、お母さんがと繰り返しまきかえし名告り出て、夜となく風となく子のよるべとなつて下さる。

それがやがて子の身にしみとおつて、「お母さん」と呼びかえし、母なくしては暮せなくなり、母のふところにやすらうようになるのである。

池山先生が岡山時代に「親と子は二つにして一つ、一つにして二つ」ということを伴の病床で知らされたと言われたことがあるが、母が子に向う時に何時も子の身になっていたので、自分を「お母さん」と、子の呼ぶ名で名告つて何の不思議も矛盾も感じないのである。

さて経典に「慈眼をもって衆生を視そなわし、平等にし

て一子の如し」と仏心を吐露されているが、それが具体的に我等に向ってあらわれて下さる至極を自然法爾章に、

「弥陀仏の御ちかひのもとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいて迎えんとはからわせたまいたるによりて、行者のよからんとあしからんととも思わぬを自然とは申すぞとききて候」

と聖人が讃仰されている。「お母さん」と母が名告り出て、子のよるべとなるように、仏御自ら南無阿弥陀仏と名告り出て、南無阿弥陀仏とたのませて真のたのみ力になつて下さるのである。

これというのも、仏の御眼に、われわれの煩惱熾盛で、まよいの境界から出ることも出来ず、はてしのない苦海に永劫流転するほかにないことを御見抜き下さり、その苦惱を御自身の苦惱とされて、救いの御手をさしのべて下さるのである。

阿弥陀経和讃に

五濁惡時惡世界、濁惡邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ恒沙の諸仏すすめたる

とあり、道綽禪師の和讃に

縱令一生造惡の衆生引接のためにとて

稱我名字と願じつゝ若不生者とちかいたり

とあり、源信和讃に

が、その妙消息が知らされる。まかれるところの無い身をまいらせて下さるのが南無阿弥陀仏の名告りである。

数年前、寺の奥さんが腎臓病で段々重態になり、尿毒症もあらわれてきた時、私に会いたいとの申出があった。早速枕頭にお見舞すると

「私は寺に生れ、朝夕御供仕をしてみましたので、色々和有難い御法話をきき、又信仰書も読んで、喜んでいました。ところが、病気で頭が駄目になり、読んだことも、聞いたこともさっぱり忘れてしまいました。今では仏様さえ疑うようになりました云々」

と、涙の告白であった。そこで、  
「貴女の御病氣としては無理のないことです。お淋しい味気ない限りでしょう。ここで申上げられますことは、雲がどんなに空を覆うても、月や太陽を消すことは出来ません。今の貴女は雲に覆われていられます。しかし、こうした聞いたことも読んだことも忘れてしまい、仏様さえほんやりしてしまふ身に、仏様が御自らあらわれて下さるのが南無阿弥陀仏です。奥様の口に浮かぶそのお念仏が、仏様の現し身です。凡愚の私共として仏にお会い出来るのは、南無阿弥陀仏だけなのです。

こうしてお聞き下さることもやがてお忘れになるでしょう、ありがたい思いも消えるでしょう、しかし南無阿弥

極惡深重の衆生は他の方便さらになし

ひとえに弥陀を稱してぞ 浄土にうまるとのべたまうと、仏の方から名告り出てお勧め下さるのである。

ここに「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらす」との念仏成仏の道が自然にひらけるのである。

○ 南無阿弥陀仏とは、仏がわれらの身になりきられて、われらの呼びまいらすべき名をもって、御自ら名告り出て下さり、真のよるべとあらわれて下さるのである。「如来の招喚の勅命なり」と聖人は信証されている。

われら凡愚が仏にお遭いするなどは思いもよらぬことであるが、仏の方から凡愚の身に、南無阿弥陀仏と名告り出て下さる、このこと以外に仏にお遭い出来る道はない。

法然上人が四国に御流罪になり、御年八十近くなられて罪を許されて、お帰りの船に乗ろうとされ「西忍聞くことはないか」と度々云われたが、西忍に不審もおこらなかつた。すでに船が漕き出された時「上人私にたすかるところはありません、一口御教化を！」と叫んだ時、「法然もたすかるところはないが、ここをよく聞け、無位無冠の法然が昇殿することが出来たのは、向うから来れと勅命がかかったからである、如来の招喚の声、南無阿弥陀仏でまいらせて頂けるのである」と、大体このように伝聞している

陀仏は、その中からあらわれて、心配するな、畏れるなと寄り添うて下さるので、人間の約束にはまったがありませんが、仏様にはまったはありません云々」と談合してお別れました。

○ 南無阿弥陀仏とは、本願の成就された御姿である。聖人の御教えは、この本願の成就にはじまる。たとえは今重病になったとする、その時、これから医師になるために修業中ですでは間にあわない。呼ぶ声に応じて直ちにあらわれる医師でなければ救われぬ。本願の成就された有様は、大劇場で用意万端ととのえて出番を待つ千両役者、合図一つですぐ飛び出すにも譬えられる。生命の且夕にせまる極重悪人こそわが身の姿であるから、これから成就するものでは間に合わない、現に成就して、直ちに私共の真実の救いとなって下さるものでなければ何の役にも立たない。

○ 弥陀仏の真実心がやうやく徹到して、念仏申さんと思いつつ心のおこる時、前なく後なく、その一刹那に攝取不捨のめぐみをたまわるのも、本願の成就されたればこそである。私が安心決定鈔をかって読み終えた日、

往生は成就しけりと喜びにあふるる弥陀の正覺の声と、腰折ながら安心決定の根源を仰いだことがある。本願成就のお念仏の尊さ、仏から名告り出て下さるものしさを讃えまつるばかりである。

あとがき

春三月、野も山も新緑に採どられました  
が、卒業、就職、入学と青少年には悲喜交  
々の緊張の連続です。こうした時に、入学  
祈願やら、占いがいたるところに流行して  
いると報道されています。私はそうしたこ  
とを聞くとも何時も心に浮ぶのは徒然草の一  
節「山家の一軒家に主人が居なければ狐狸  
が自申に入入りするが若し老婆でも主人が  
居れば人でさえ挨拶なしに出入り出来な  
い。人々も心を空家にしないで主人を持  
て」というものがあります。

平素無事な時は笑って相手にしなかった  
ことも、苦しいこと、心配なこと、不安な  
問題がおこると、苦しい時の神だのみがは  
じまります。先般総理が訪ソの時、お守り  
を肌につけていて、あちらの首として週刊  
脳部の人に苦笑を買ったと娘さんの物語り  
誌に出っていました。話は変わりますが又先年  
カソリック信者でもない新婚の数組の人々  
がスイスの教会で挙式をして、世間の嘲笑  
と非難をうけ、日本人の宗教軽視の恥部を  
世界にさらし、又牧師の利益主義もきびし  
い批判をうけました。こうした空家同様の  
生活が狐狸の横行となっていたまじしい現状  
が織りなされています。

聖人のお勤め下さる真宗は、本願を開  
き、信順して、泥田に蓮華の咲くように、

煩惱の中に仏心の華が開くので、我々の欲  
望満足を仏にかなえて貰うことではありま  
せん。人間の持つ欲望は満たされても満た  
されないでも迷界の流転で真実の光は射し  
ません。

九十五種世をけがす  
唯仏一道清くます

菩提に出道は自然なる  
火宅の利益は自然なる

との正像末和讃を作られた聖人の悲心火  
と燃えるのをおぼえます。

可説居士は八年前に浄土にかえられまし  
たが、仏縁がありがたく拘置所の独房にあっ  
て、八方塞がりの中から無碍の仏心の光を  
渴仰して、遠くはなれた二人の子供さんの  
将来を思うにつけ、この仏心に気づいて呉  
れるようにと念じ続けて珠数を送り、仏画  
をとどけていました。足利浄円先生の「光  
輪」を読み度々御礼状を出していました、  
佐々木徳真さん御夫妻が伝聞されて慰問し  
て下さったことも忘れ得ないことでした。  
福田教誨師夫妻はこの遺文を読まれ、彼  
を殺すべきでなかったと感泣して別れを惜  
しまれました。  
よき人に呼ばれてのぼる不二の山  
とは私が居士から貰った句です。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。  
一道会例会。南区駅上町二ノ八八  
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル  
三筋目、左入ル。二軒目  
地下鉄、金山カラ、新端橋終点下車、徒  
歩十五分。市電ハ廃止。  
○毎月二十四日。午前午後、昭和区小椋  
町、教西寺、法話会。  
市バス、御器所通り下車。  
又ハ、北山下車。

定価	半年	四〇〇円(送共)
	一年	八〇〇円(送共)
編集・発行人	名古屋市南区駅上町二ノ八八	花田 正夫
電話	八二一局七〇三七番	
愛知県西加茂郡三好町大字福谷		
印刷人	吉野 穂 志郎	
名古屋市南区駅上町二ノ八八		
発行所	慈 光 社	
振替口座	名古屋 一〇四七〇番	
郵便番号	四五七	